

まえがき

今年度の叢書は二部構成をとっている。

第一部は、例年と同じく、公開実験授業の記録である。今年度の公開実験授業の最も大きな特徴は、前期・後期を通じて討論形式の授業が行われたことである。また、今年度は受講者数が前期24名、後期18名という少人数のクラスだった。少人数だったからこそ、1年を通じての討論形式の授業が可能であったともいえる。過去8年間の公開実験授業のなかで、各授業者によって討論形式がとり入れられたことは幾度となくあるが、このように年間を通して主要な学習活動の位置を占めたのは、今年度がはじめてである。内容についてみても、授業者によって多少の違いはあるが、「先生方が完全に脇役に徹する」(ある受講者のアンケート記述より)という構造化の緩やかな授業であった点でほぼ一貫していた。また、とくに後期では、MLやBBSなど授業外での学習や相互行為を促すための環境も設定された。そういう意味で、今年度の公開実験授業では、これまでとはかなり色合いの異なる〈実験〉が行われたということができよう。その実験の成果については、本文をごらんいただきたい(データの収集・整理はRAの篠崎未生さんによる)。

今年度は、公開実験授業を始めて8年め、第一期(1999年度～)の5年めにあたる。これまでの8年間は、毎週月曜4限に公開授業を実施し、5限に授業検討会を行ってきた。この〈公開授業+授業検討会〉という相互研修型FDの活動は、山形大学、和歌山大学、島根大学など複数の大学においてFD活動のモデルとして採用され、文部科学省のWebページでも特色あるFD活動の事例として紹介されている。しかし、参観者数はここ数年、減少傾向にある。とりわけ、学内の参観者がセンタースタッフ以外ほとんど皆無であることは、公開実験授業が学内のFDを目的の一つとしていることを考えれば、決して看過してよい事態ではない。そこで、今年度から、「学部公開授業」を実施した。これは、各学部の授業を公開していただき、当該学部の教官をまきこんで授業参観、授業検討会を行おうというもの(別名「出張型公開授業」)である。今年度は、11月14日に工学部の垣内隆教官の「分析化学」、12月3日に総合人間学部の小田伸午教官の「トレーニング科学」を公開していただいた(巻末資料参照)。参観者はまだ少数にとどまっているが、来年度以降も継続していきたいと考えている。

このような「学部公開授業」の開始に伴って、来年度以降は、公開実験授業を毎週実施することはやめ、学部公開授業と公開実験授業(「ライフサイクルと教育」)をあわせて年6回程度実施することで、学内・学外のFD活動を行っていくことにした。つまり、毎週月曜の授業公開は今年度限りでいったん終止符を打つということである。第一部は、過去8年間、公開実験授業の牽引車的役割を果たしてきた田中毎実による中間的総括の論文である。この8年間の公開実験授業とは何だったのか。公開実験授業についての論考はこれまであちこちの媒体に掲載されてきたが、これほどまとまった形で考察がなされたのはこの論文がはじめてである。

補論は、本センターで行っている「大学授業ネットワークプロジェクト」に関する論考である。大学授業ネットワークのWebには、学内・学外の興味深い授業実践が動画もまじえて公開されているが、今年度は、そこで紹介されている授業実践についての座談会を2回行った(この座談会のもようもWeb上で公開されている)。従来、公開実験授業の記録をおさめてきた本叢書にこの論考を掲載したのは、大学授業ネットワークのWebサイトにおける授業公開とそれについての座談会が、公開授業の参観と授業検討会という公開実験授業のスタイルの一つの発展型と考えられるからである。実際の授業を参観して直後に検討会を行うのと比べて、Web上の動画や説明によって授業をイメージし、それにもとづいて座談会を行うことには、いくつかの困難が伴う。しかし、そこには検討できる授業実践の時間的・空間的制約を超えられるというメリットもある。どんな課題や可能性があるのか、この叢書を目にされた方からもぜひご意見をいただきたいと思う。

平成16年2月
松下佳代